

vol. 18
2013年
9月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「自分を信じて」 - 102歳の画家 -

こしば ちえこ
小柴 千枝子

1910年(明治43年)
千葉県房総市生まれ
中葛西在住



春は風景

春は風景。アネモネは3月までだからね。桜は4月だけど、桜は油絵にならない。季節にあった絵の描き方をやらなければ。

師範学校で週2時間、水彩画と工作を5年間やりました。楽しみであり、はげしい勉強の合間の癒しの時間でした。師範学校4年生、18歳の時、先生がわたしの描いた水彩画を県の教職員展に出して、銀賞を取りました。この賞は大きな自信と励みに。いつか暇ができたら絵を描きたいと考えるようになりました。

生まれ育ったのは、千葉県安房郡丸山町(現南房総市)です。母は尋常小学校の教員でした。わたしが生まれたころ、託児所はありません。母は、勤め先にわたしと子守を連れて通いました。校長先生が「この子は将来が楽しみだから、しっかり育てなさい」と。おおらかな時代でした。

わたしたちきょうだい3人が小さい時、妹はよそに預けられていました。わたしは弟の面倒をみていました。遊ぶ道具なんて何もなくて、近くに膝までの浅い小川があって、弟を連れてドジョウとかフナとか捕りに行ってね。そういうのが遊びだったのです。

子どものころは白米。野菜を多く、肉はほとんど食べない。鶏を飼っていたから卵は少し、魚は売りに来るものを少し。隣のおばあさんが、雑穀の混ぜご飯をよく持って来てくれました。学問は無いけど聞いたことは忘れない、頭の良い人。だから、見るとわかるんだね。子どもが白米を食べていて、栄養が足りないのが、偉い人だよ。わたしの画集におばあさんの絵が出ていますよ。

父は千葉県師範学校の剣道部長でした。母は千葉県女子師範学校の出身です。1925年、数え15歳で、わたしも千葉県女子師範学校に入学しました。難しかったよ、試験。4日間、体力、筆記、そろばん、歌、最後に口頭試問。各市町村から代表ひとりどりで6倍の競争率。尋常小学校から高等小学校に進み、2年生の時入学試験を受けたの。小学5年生の時から家に帰ると1時間、その日勉強したことを覚えるの。毎日が勝負、毎日が試験勉強だった。

女子師範学校は40人ひとクラスだけ。寄宿舎で一緒

に生活し、勉強するの。卒業したときは33名。全員が、尋常小学校か高等小学校の教員になったの。

夏は描かない

このごろ描いてないの。夏は制作できないですね。果物は描けば絵になるけど、3日ぐらいで新しくとりかえなければならぬから。

表現にもいろいろあります。人よりうまく表現したいと、発色の研究を続けてきました。花の絵のようにきれいな色の絵は喜ばれます。でも、色だけではないですよ。ひとつの画面が一体となって助け合い溶けあわねば。

わたし、師範学校時代に何度もからだを悪くしたの。「あなたはなぜ病気ばかりしているの」って、先生が怒るの。「寄宿舎の食事が悪いからですよ。肉、卵、魚がいつぱいで、野菜が少なくて、偏食になっている」って言ったの。わたしは、子どものころ、野菜とかしっかり食べて健康に育ったでしょ。だから、何が足りないか、食べた感覚でわかったのよ。

でも、けんかして出たらおしまいだから、我慢した。将来栄養学を研究して、きちんと説明できるようになって、やり返してやるって考えた。卒業まで危なかったよ。病気で、授業を休んだり、田舎に保養でひと月帰ったり。田舎に帰っても、親が亡くなっていたから、自分で料理を作って食べたの。

父は、わたしが7歳の時、剣道の怪我がもとで亡くなりました。母は、わたしが師範学校3年の時、急死。40歳ですよ。過労で死んだのです。校長が尋常小学校の1年生の担任持たせてね、高等学校の家庭科まで、二重にやらせたの。母は優等生だから、人に反抗するってこと知らないから、無理をした。

20歳で教員になった時、卒業したての何もわからないわたしが、小学2年生の男の子50人の組を受け持たされた。学校で一番暴れる子どもたちでね。教壇まで出てきて、万年筆持って、外へ出てっちゃったの。授業中だよ。わたしも追いかけて取り返した。師範学校の先生に頼んで、別の学校に替えてもらいました。女だからって、馬鹿にされても、負けない。我慢しないようにしているんだ。

